

# 「深い学び」のある生活科の授業

杉能 道明<sup>※</sup>

Life Environment Studies and "Deep Learning"

Michiaki SUGINO

A new elementary school course of study was introduced in March, 2017. "What children can do" in this revision were emphasized, and "three pillars of nature and ability aimed at growing up" were shown. To raise the nature and ability, "how children learn" is very important. We must try to aid children to learn actively, interactively and deeply. However, an image of this "deep learning" does not become clear in class of Life Environment Studies. In addition, the directionality of the class improvement cannot be cleared.

Therefore, I try to clarify something about "deep learning" in the class of Life Environment Studies and consider a strategy for "deep learning" realization. I regard "deep learning" as "raising quality with KIZUKI" and expanding "dialog" and suggest the behaviour of children who have realized "deep learning" concretely.

Keywords : Three pillars of nature and ability aiming at growing up, Deep Learning, KIZUKI

## 問題の所在

### 1. 生活科の「深い学び」が明確になっていない

小学校学習指導要領(平成 29 年告示)(以下, 新指導要領)が告示され, 厳しい挑戦の時代を生き抜く子どもたちを育てる学校教育では「何ができるようになるか」が重視されることになった。つまり, コンピテンシーベースの改訂ということになる。これに応えるものが「育成を目指す資質・能力の3つの柱」である。

## 育成を目指す資質・能力の3つの柱

- |  |
|--|
| <p>①生きて働く「<u>知識・技能</u>」の習得<br/>…「何を理解しているか, 何ができるか」</p> <p>②未知の状況にも対応できる「<u>思考力・判断力・表現力等</u>」の育成<br/>…「理解していること・できることをどう使うか」</p> <p>③学びを人生や社会に生かそうとする「<u>学びに向かう力・人間性等</u>」の涵養<br/>…「どのように社会・世界と関わり, よりよい人生を送るか (下線: 筆者)<br/>(幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び</p> |
|--|

キーワード：育成を目指す資質・能力, 深い学び, 気付き

※ 本学人間生活学部児童学科

特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）平成28年中央教育審議会（以下、中教審答申）より）

「資質・能力の3つの柱」を育成するためには「どのように学ぶか」という視点が大切になる。これに応えるものとして「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング：AL)という3つの授業改善の視点が提案された。

「主体的・対話的で深い学び」の3つの視点  
(中教審答申より)

① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。  
(下線:筆者)

「深い学び」は新指導要領で授業改善の視点の1つとして示されたものであるが、「主体的な学び」「対話的な学び」に比べて分かりにくいという指摘がある。生活科においても、「深い学び」とはどんな学びなのか明確になっているとは言えない。「深い学び」の視点は重要である、と指摘されたり、ある特定の型や指導方法を普及させる意図はない（つまり型ではない）と示さ

れているものの、「深い学び」を実現した具体的なイメージ（子どもの姿）が明確になっていない。

## 2. 生活科の「深い学び」実現に向け授業をどう改善するかが明確になっていない

前述のように生活科の「深い学び」を実現した具体的なイメージ（子どもの姿）が明確になっていないので、当然、「深い学び」実現に向けた授業改善の方向性も明確になっているとは言えない。生活科の「深い学び」実現に向け授業をどう改善すればよいのかを明らかにしていく必要がある。

### 生活科の役割と「深い学び」

#### 1. 生活科の「つなぐ」役割

今回の学習指導要領改訂では、これまでより一層、生活科の「つなぐ」役割が強調された。新指導要領の第1章総則「4 学校段階等間の接続」に次のような記述がある。

学校段階等間の接続（新指導要領より）

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。

また、低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科間等の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、

合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。  
(下線:筆者)

下線部のように、生活科と他教科等との接続(横のつながり)、幼児期と小学校低学年との接続・小学校低学年と中学年以降の教育との接続(縦のつながり)に生活科は重要な役割を果たすことが明記された。特に、幼児期の教育と小学校教育を円滑に接続するために、小学校入学当初にスタートカリキュラムを教育課程に位置づけるよう提案された。幼児期における遊びを通じた総合的な学びから、児童期での各教科等におけるより自覚的な学びへ円滑に移行することが大切である。そのために、入学当初は幼児期の生活に近い活動と児童期の学び方を織り交ぜながら、幼児期の豊かな学びと育ちを踏まえて、児童が主体的に自己を発揮できるようにする場面を意図的につくることが求められる。これがスタートカリキュラムであり、生活科を中心として合科的・関連的な指導を行うことになる。

## 2. 幼小の接続と「深い学び」

幼児期の教育との円滑な接続を図るためには、まず、幼児期の終わりの子どもの姿が共有できると取り組みやすい。また、幼小で育成すべき資質・能力、学び方、見方・考え方がつながっておく必要がある。特に、「深い学び」の鍵として指摘されている「見方・考え方」がつながっておくことが重要である。

### (1) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

生活科においては、指導計画作成上の配慮事項として「幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること」が示された。「幼児期

の終わりまでに育ってほしい姿」は幼稚園教育の5領域の内容を踏まえ、5歳児修了時までには育ってほしい具体的な姿を10に整理したものである。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

(中教審答申より)

- |   |                  |
|---|------------------|
| ア | 健康な心と体           |
| イ | 自立心              |
| ウ | 協同性              |
| エ | 道徳性・規範意識の芽生え     |
| オ | 社会生活との関わり        |
| カ | 思考力の芽生え          |
| キ | 自然との関わり・生命尊重     |
| ク | 数量・図形、文字等への関心・感覚 |
| ケ | 言葉による伝え合い        |
| コ | 豊かな感性と表現         |

小学校教育、特に生活科を中心としたスタートカリキュラムの中で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が発揮できるよう様々な工夫を行いながら、各教科等の学びにつなげていく必要がある。

### (2) 育成を目指す資質・能力の3つの柱

中教審答申では、幼児教育において育みたい資質・能力について、次のように解説されている。

幼児教育において育みたい資質・能力

- |   |   |
|---|---|
| ① | 「知識・技能の基礎」(遊びや生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何が分かったり、何ができるようになるのか)                |
| ② | 「思考力・判断力・表現力等の基礎」(遊びや生活の中で、気付いたこと、できるようになったことなども使いながら、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするか) |
| ③ | 「学びに向かう力・人間性等」(心情、  |

意欲、態度が育つ中で、いかによりよい生活を営むか)  
(下線:筆者)

また、小学校学習指導要領(平成29年告示)解説生活編(以下、新解説生活編)では、生活科において育成を目指す資質・能力について、次のように解説されている。

生活科において育成を目指す資質・能力

①「知識・技能の基礎」(生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何が分かったり、何ができるようになったりするか)

②「思考力・判断力・表現力等の基礎」(生活の中で、気付いたこと、できるようになったことを使って、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするか)

③「学びに向かう力、人間性等」(どのような心情、意欲、態度などを育み、よりよい生活を営むか)  
(下線:筆者)

このように、幼児教育において育成を目指す資質・能力と生活科において育成を目指す資質・能力とは酷似している。いずれも資質・能力の①②の末尾に「の基礎」という言葉がある。「問題の所在」で記した他の教科等の資質・能力には見られない言葉である。これは、幼児期の学びの特性を踏まえ、育成を目指す3つの資質・能力を截然(せつぜん)と分けることができないことによっている。生活科が教育課程において、幼児期の教育と小学校教育を円滑に接続するという機能をもつことを明示している。

### (3) 学び方

中教審答申では次のように幼児教育にも「主体的・対話的で深い学び」が示されている。

幼児教育の「主体的・対話的で深い学び」の3つの視点

①周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働き掛け、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら、次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

②他者との関わりを深める中で、自分の思いや考えを表現し、伝え合ったり、考えを出し合ったり、協力したりして自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

③直接的・具体的な体験の中で、「見方・考え方」を働かせて対象と関わって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返す、生活を意味あるものとして捉える「深い学び」が実現できているか。

(下線:筆者)

幼児教育では、遊びを通じた総合的な学びが行われ、小学校教育では各教科等における学習が行われる。それが円滑に接続するためには「主体的・対話的で深い学び」という学び方につながっている必要がある。そして、「深い学び」の説明の中には幼児教育でも生活科でも「見方・考え方」という言葉がある。「見方・考え方」は「深い学び」の鍵と言われている。

### (4) 見方・考え方

中教審答申では、「見方・考え方」について次のような記述がある。

各教科等の「見方・考え方」

各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。

「幼児教育部会における審議の取りまとめ」には、「見方・考え方」について次のような記述がある。

#### 幼児教育における「見方・考え方」

幼児がそれぞれの発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね遊びが発展し生活が広がる中で、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、諸感覚を働かせながら、試行錯誤したり、思い巡らしたりすることである。

このような「見方・考え方」は、遊びや生活の中で幼児理解に基づいた教員による意図的、計画的な環境の構成の下で、教員や友達と関わり、様々な体験をすることを通して広がったり、深まったりして、修正・変化し発展していくものである。また、このような様々な体験等を通して培われた「見方・考え方」は、小学校以降において、各教科等の「見方・考え方」の基礎になるとともに、これらを統合化することの基礎となることが期待されている。

生活科の目標にも、「身近な生活に関わる見方・考え方を生かし」という言葉がある。目標達成のための重要な視点や考え方であることが分かる。新解説生活編には「見方・考え方」について次のような記述がある。

#### 生活科の「見方・考え方」

##### 「身近な生活に関する見方・考え方」

身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする事。

「見方・考え方」が学びの過程の中で働くことを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が生まれたりし、それによって「見方・考え方」が更に

豊かなものになると考えられている（中教審答申より）。スタートカリキュラムは、幼児教育における遊びを中心として総合的に育まれる「見方・考え方」を、生活科の「見方・考え方」につなげる役割を持っている。また、生活科を中心とした合科的・関連的な指導を行うことで、幼児教育における「見方・考え方」を生かし、次第に意図的、計画的、組織的になっていく低学年における各教科等の「見方・考え方」にもつながっていく。さらに、第3学年以降の社会科における「社会的事象の見方・考え方」や理科における「理科の見方・考え方」、総合的な学習の時間における「探究的な見方・考え方」などの「見方・考え方」につながっていくものと考えられる。

#### 生活科における「深い学び」とは何か

##### 1. 生活科における「気づき」と「深い学び」

###### (1) 改訂の度に大切にされた「気づき」

生活科は平成元年の教科創設当初から「具体的な活動や体験」を重視してきた。しかしながら、改訂の度に「活動あって学びなし」という指摘を受けてきた。小学校指導書生活編（平成元年）には、「新たな気づきをする」「自分自身への気づき」という言葉が見受けられる。具体的な活動や体験を学びとして位置付けたい、という思いが改善の基本方針のキーワード「気づき」に現れている。

#### 生活科の改訂とキーワード「気づき」

|      |        |                               |
|------|--------|-------------------------------|
| 1989 | 生活科創設  | 新たな「気づき」をする<br>自分自身への「気づき」    |
| 1998 | 最初の改訂  | 知的な「気づき」を大切に<br>する            |
| 2008 | 2度目の改訂 | 「気づき」を質的に<br>高める              |
| 2017 | 3度目の改訂 | 「気づき」を確かなものとし<br>新たな「気づき」を得たり |

ここでいう生活科の「気付き」とは何か。

生活科の「気付き」（新解説生活編より）

- ①対象に対する一人一人の認識
- ②児童の主体的な活動によって生まれるもの
- ③知的な側面だけでなく、情意的な側面も含まれる
- ④次の自発的な活動を誘発するものとなる

## (2) 「気付きの質を高める」とは

2008の2度目の改訂から出てきた「気付きの質を高める」という言葉はどのような意味なのだろうか。

「気付きの質を高める」とは

(新解説生活編より)

- ①無自覚だった気付きが自覚される
- ②一人一人に生まれた個別の気付きが関連付けられる
- ③対象のみならず自分自身についての気付きが生まれる

生活科では、特に自分自身についての気付きを大切にしている。生活科創設以来一貫して大切にしてきた「自立への基礎を養う」ことにつながるからである。自分自身についての気付きとしては、次のようなことが重視される。集団における自分の存在に気付くこと、自分のよさや得意としていくこと、また、興味・関心を持っていることなどに気付くこと、自分の心身の成長に気付くことである。

新解説生活編の「内容の取扱いについての配慮事項」に次のような言葉がある。

「気付きの質を高める」と「深い学び」

表現する活動は、気付いたことを基に考え、新たな気付きを生み出し、気付きの質を高める深い学びにもつながる。(中略)

このように気付きを自覚したり、関連付けたり、視点を変えて捉えたりすることが気付きの質を高めることであり、そのことこそが生活科における「深い学び」の姿の顕著な現れの一つと考えることができる。

(下線：筆者)

このことから、「深い学び」は「気付きの質を高める」ことであると考えることができる。

## 2. 生活科における学びのプロセスと「深い学び」

### (1) 生活科の学習過程

新学習指導要領が示した「主体的・対話的で深い学び」の学び方は、生活科の学習過程そのものであるといえる。新解説生活編では、生活科の学習過程を次のように示している。

生活科の学習過程

- ①思いや願いをもつ
- ②活動や体験をする
- ③感じる・考える
- ④表現する・行為する(伝え合う・振り返る)

いつも①～④が順序よく繰り返されるものではなく、順序が入れ替わることもあるし、一つの活動の中に複数のプロセスが一体化して同時に行われる場合もある。

### (2) 「具体的な活動や体験」の重視

生活科では、教科創設以来、具体的な活動や体験を重視してきた。生活科の「具体的な活動や体験」とはどんな活動のことなのか。

生活科の「具体的な活動や体験」とは

(新解説生活編より)

- ①対象に直接働きかける学習活動(例えば、

見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなど)

②表現する学習活動（そうした活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法によって表現する）（下線：筆者）

ここでいう「対象」とは、「身近な人々、社会及び自然」のことである。新解説生活編では、次のような記述がある。

「気付き」のために重視する学習活動

具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考え、気付きを確かなものとしたり、新たな気付きを得たりするようにするため、活動や体験を通して気付いたことなどについて多様に表現し考えたり、「見付ける」、「比べる」、「たとえる」、「試す」、「見通す」、「工夫する」などの多様な学習活動を行ったりする活動を重視すること

（下線：筆者）

小学校に入学したばかりの時期においては、意識的に振り返りを行うというよりは、表現し伝え合う学習活動を行うことが学びの振り返りになるという時期であり、活動や体験したことを言葉などによって振り返ることで、無自覚な気付きは自覚的になったり、一つ一つの気付きが関連付いたりするという意義を持っている。つまり、思いや願いを実現する体験活動を充実させ、表現活動を工夫することで「深い学び」につながると考えられる。

生活科における「深い学び」実現のための提案

### 1. 2つの「対話」の充実

生活科における「深い学び」実現のためには2つの「対話」の充実が大切と考える。1つ目は、主として教師や友達との「対話」

である。2つ目は、学習対象との「対話」である。

#### (1) 主として先生や友達との対話

…「対話的な学び」の「対話」

前述のように、新指導要領では、「対話的な学び」の視点が重視される。この「対話」は、人（主として教師や友達）との「対話」のことである。教師の発問や問い返しによって「対話」し、自分の考えを振り返る中で、「深い学び」に向かうことができる。友達との「対話」では、友達の話に黙って聞くだけでなく、自分の気付きと比べながら、質問したり、付け足ししたり、反論したり、よいところを見つけてほめたり（よいこと見付けすること）することで双方向の「対話」が生まれ、「深い学び」に向かうことができる。

梶田（2017）は、対話が成立するために大切な条件を次のように述べている。

対話が成立するために大切な3条件

- ①自分自身の見方や考え方を、自分自身の実感・納得・本音に基づき、ある程度まできちんと作った上で相手に対し発信する。
- ②相手の見方や考え方に十分に耳を傾け、すぐに同調したり迎合したりしないで、自分自身の見方や考え方と違うところ同じところについて考えてみる。
- ③（省略）自他の間にある違いを多面的に吟味検討し、相互の対立が乗り越えられるような新しい視点を互いの努力によって見つけ出すことに努め、それを何らかの形で実現するようにする。

①について。まず、自分の考えをもっていることが前提で、その上で、相手に自分の考えを伝えるということである。生活科では、自分が気付いたことを言葉で絵で劇などの多様な表現方法で伝えることにな

る。②について。次に、友達の考えをよく聴いて、自分の考えと比べて共通点や相違点について考えることになる。「十分に耳を傾け、すぐに同調したり迎合したりしないで」とあるように、クリティカル・シンキング（批判的思考）を働かせることが重要である。③について。互いの思いや願いを出し合うと、違いや対立が生まれることがある。それを乗り越えることができれば、子ども同士の関係が強くなることになる。

「対話的な学び」は主に人との「対話」を意味している。しかしながら、中教審答申までの検討過程では次のように別の捉え方もあったようである。

#### 「対話的な学び」の視点

「対話的な学び」とは、他者との協働や外界との相互作用を通して、自らの考えを広げ深める学びである。（下線：筆者）（生活・総合的な学習の時間ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（生活）より）

この「外界との相互作用」という言葉は、人以外のものとの対話を含むイメージがあることを示している。子どもを取り巻く環境、身近な人々、社会及び自然を指すと捉えることができる。

## （2）対象・他者・自己との「対話」

### … 学習対象との「対話」

生活科では、対象に直接働きかけるだけでなく、それらの対象が子どもにも働き返してくるという双方向性のある活動が行われる。対象と直接関わり、対象とのやりとりをする中で、感じ、考え、気付くなどして「対話的な学び」が豊かに展開されていくことが求められる。

佐藤（1998）は「対象・他者・自己との対話」の考えを提案している。岡山大学教育学部附属小学校（2006）では、かけはし

学習の中で、私と他者（友達など）、私と対象（身の回りの事物、現象）、私と自己（客体としての自己）とのかかわりのことをそれぞれ「対象との対話」「他者との対話」「自己との対話」と呼び、これら3つとのかかわりが見られるとき「豊かな学び」と呼んでいる。

#### 岡山大学教育学部附属小学校が考える3つの対話

##### ⑦他者との対話

気持ちや考えを伝え合ったり、教え合ったり、相談したりなどして、互いに影響を与えながら活動する

##### ④対象との対話

今までの経験や身に付けた力を生かして、触れる・観る・試す・比べる・調べる・つくるなどして、対象の不思議さ・おもしろさ・特徴などを感じ取る

##### ⑨自己との対話

できたことや分かったこと、努力や工夫などを振り返り、自分のとった行動やもった考えを見直したり、自分のよさや成長に気付いたりする。

3つの対話の中でも、特に、自己との対話を大切にしたい。生活科では、対象（身近な人々、社会及び自然）との対話の後、表現活動を行う。これは、言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法によって表現することであるが、これにより、無自覚だった気付きが自覚されることになる。つまり、気付きの質を高め「深い学び」につながる重要な活動である。この表現活動は具体的な活動や体験を対象化する活動であり、自分に向けて表現する活動「自己との対話」と捉えたい。

自己との対話の究極のねらいは「自問自答」「自己内対話」である。そのきっかけが表現活動であり、他者との対話が不可欠



である。ここでいう、「対話」は話し合いではない。「言語活動の充実」として盛んに授業にペアやグループの活動が取り入れられるようになったが、考えが深まり広がっていない場合がある。中教審答申の「対話的な学び」の説明にも「自己の考えを広げ深める」という言葉がある。自己の考えが変わらなければ「対話」とは言えないのである。

梶田(2017)は「自己内対話」について次のように述べている。

#### 自己内対話

〈自己内対話〉こそ「考える」ということにほかならない。(中略)教師と学習者が対話し、学習者同士が対話することが、学習者個々人の内面における〈自己内対話〉へと深化し、発展していくことを願いとしていかなければならない。(中略)〈自己内対話〉が真に実りあるものとなるためには、当然のことながら、その前提となる他者との〈対話〉のあり方が大事な意味を持つ。

## 2. 「深い学び」実現のための方策

「対話」を充実させ、「気付きの質を高め」、「深い学び」を実現するために次の4つの方策をつなげて行うことが必要だと考える。

### (1) 試行錯誤や繰り返す活動を設定する

「対象、他者、自己」との「対話」を充実させるためには、繰り返し対象と関わったり、試行錯誤して何度も挑戦することができるよう支援する必要がある。

これにより、「見付ける」、「比べる」、「たとえる」、「試す」、「見通す」、「工夫する」などの多様な学習活動が可能になり、「気付きの質を高める」ことにつながる。

### (2) 伝え合い交流する場を工夫する

伝え合い交流する活動ができるよう支援する必要がある。

一人一人の気付きを伝え合い交流する中で、自分の気付きや友達の気付きを比べ、似ているところや違うところを見付けることになり、気付きが関連付けられ、「気付きの質を高める」ことにつながる。

### (3) 振り返り表現する機会を設ける

振り返り表現する活動として、言葉、絵、動作、劇化などの多様な表現方法を工夫したい。

活動や体験を振り返り表現することで、無自覚だった気付きが自覚されたり、表現されたそれぞれの気付きを共有し関連付けたりすることが可能になり、「気付きの質を高める」ことにつながる。

### (4) 児童の多様性を生かし、学びをより豊かにする

児童一人一人には違いや特性がある。学級で学ぶからには、その多様性を生かすことが重要である。

一人一人が気付くことは違っていても、その違いや共通点を見出す中で、気付きが関連付けられ、「気付きの質を高める」ことにつながる。

また、多様な他者がいることで、自己を振り返り、集団における自分の存在に気付く、自他の目を通して自分のよさや得意としていることなどに気付くなど、自分自身についての気付きが生まれ、「気付きの質が高まる」という面もある。

## 3. 「深い学び」を実現した具体的な子どもの姿を描く

### (1) 「深い学び」のキーワードを確かめる

中教審答申の「深い学び」の説明から、キーワードを確かめると、

### 「深い学び」のキーワード

- ①習得・活用・探究という学びの過程の中で
- ②各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら
- ③知識を相互に関連付けてより深く理解したり
- ④情報を精査して考えを形成したり
- ⑤問題を見いだして解決策を考えたり
- ⑥思いや考えを基に創造したりすること

である。また、前述より、⑦「気付きの質を高める」こともキーワードである。

### (2)「深い学び」を実現した具体的な子どもの姿を描く

前述の①②⑤は、生活科の学習過程に関わることである。子どもの思いや願いを実現する体験活動を充実させ、表現活動を工夫することで「深い学び」につなげていくことが大切である。③④⑥⑦は、子どもが気付きの質を高める姿である。例えば、次のような姿が考えられる。

### 「深い学び」の子どもの姿の例

- ⑦学級で一人一人が異なる野菜を栽培し、毎日の水やりや草取りなどの世話を繰り返してきて、「ミニトマトもナスもキュウリも、どれも花が咲いたところに実がなります。別の野菜もみんな同じです。」「でも、つるが伸びるのはキュウリだけです。」と植物の斉一性や多様性に気付く。
- ④どんぐりゴマを作って遊ぶ活動では、友達と一緒に回して遊ぶ場を用意することで、互いにコマを回し合い、どちらが長く回っているか、どちらが強いかなどを競争する姿が生まれる。自然に友達と自分のコマを比べ、違いを見付け出し、コマを改良しようとする子どもの姿である。コマの形、軸の長さや位置などを考え工夫し、「丸い

形のドンぐリがよく回る」「つまようじの軸を短くしたらよく回る」などと気付く。

⑤石の下にコオロギを発見した子どもが、どんなところにコオロギがいるのかを調べ始め、何度も何度もコオロギを探す中で、「側溝の中」「草むらの中」「ベンチの下」などで見付け、コオロギがいる場所の特徴に気付いた。今度は、「コオロギの好きな場所は、暗くてじめじめしたところかもしれない」とコオロギがいる場所を予想して探すようになった。

⑥水やりなどアサガオの世話を毎日続けてきた子どもが、「毎日アサガオのお世話をしたので、アサガオが大きくなりました。アサガオと一緒にわたしも大きくなりました。」と自分自身の心の成長に気付く。(小学校学習指導要領解説生活編(2008)より)

⑦は、いろいろな野菜を栽培したことを振り返り、その特徴の共通点や相違点に気付いており、③の姿と考えることができる。

④は、どんぐりゴマを作り回す活動を通して、比べたり、試行錯誤しながら工夫したりする中で、よく回るコマのひみつを見付け出した姿であり、③⑤⑥の姿と考えることができる。

⑤は、コオロギを探し見つける活動を通して、帰納的に考え、コオロギがいる場所の特徴に気付くことができている。特徴に気付いてからは、それを生かして予想して探すようになっており、③⑥の姿と考えることができる。

⑥は、アサガオという対象への気付きだけでなく、自分自身への気付きがあるので、⑦の気付きの質を高めた姿と考えることができる。

「深い学び」は1時間の授業の中だけにあるとは限らない。①について、新解説生活編第1章総説には「主体的・対話的で深

い学び」について次のような言葉がある。

単元で「深い学び」の実現を図る

1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。 (下線：筆者)

1つ1つの授業の中だけでなく、単元や題材を通して子どもが「気付きの質を高める」姿を描いていくことが大切である。

#### おわりに

「深い学び」は「気付きの質を高める」ことであると考えることができる。そのために、授業改善の方策として、「対話」を充実させ、「深い学び」の具体的な子どもの姿を描くことが重要である。

生活科の誕生から30年がたとうとしている。新指導要領が告示され、新しい教育の方向性が示された。教育には不易と流行があり、生活科にも不易と流行がある。

生活科の不易の部分について考えてみる。低学年の教科として、子どもの発達段階を考慮し「具体的な活動や体験」を重視することは変わらない。「自立への基礎」を培うねらいも一貫している。

一方、流行の部分について考えてみる。「資質・能力の3つの柱」の育成、「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善である。今までより一層、「何ができるようになるか」の視点が大切になる。生活科の学びは「遊びも学習なのである」と言われる通り、子どもが自分の思いや願いの実現に向けて具体的な活動や体験をするところから始まる。「活動あって学びなし」と言

われないためにも、対話を通して「気付きの質を高める」こと「深い学び」を目指すことがより期待される。「どのように学ぶか」の視点である「主体的・対話的で深い学び」。これは、生活科の創設以来ねらいとしてきた、生活科の不易とつながる視点ではないだろうか。つまり、生活科は教科の創設当時から、主体的・対話的で深い学びを目指してきたのである。

今後も、生活科における「深い学び」を実現する授業づくりについて考え続けていきたい。

#### 参考・引用文献

- 1) 文部省 (1989), 小学校指導書生活編, 教育出版
- 2) 佐藤学 (1998), 教師というアポリア, 世織書房
- 3) 岡山大学教育学部附属小学校かけはし学習研究会 (2006), 学校が大好きな1年生をめざして, 東洋館出版社
- 4) 文部科学省 (2008), 小学校学習指導要領解説生活編, 日本文教出版
- 5) 生活科・総合的な学習の時間ワーキンググループ (2016), 生活科・総合的な学習の時間ワーキンググループにおける審議の取りまとめ (生活)
- 6) 幼児教育部会 (2016), 幼児教育部会における審議の取りまとめ
- 7) 中央教育審議会 (2016), 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)
- 8) 梶田叡一 (2017), 対話的な学び, 金子書房
- 9) 文部科学省 (2018), 小学校学習指導要領 (平成29年告示), 東洋館出版社
- 10) 文部科学省 (2018), 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説生活編, 東洋館出版社